

学部を超えた授業連携の試み — 子どもを中心とした多職種連携を見据えて —

熊谷 享子・井中 あけみ・富田 秀仁

I. はじめに

本研究は、子どもたちの生活の場である幼稚園、保育所、こども園で展開されようとしているインクルーシブ保育などへの対応について、多職種連携・協働への取り組みを深めていくため、その前段階として養成校における他学科や連携授業についての取り組みを考察するものである。これらについては現代の日本の保育・教育界においては課題の一つとして考えられる。

例えば、保育所において障害のある子どもや、その保護者に対する相談援助活動が行われるわけであるが、個々の専門職（保育士・保健師・医師等）の専門性や考え方の相違などから、多職種連携・協働体制が進展しにくいことは避けられない状況といえよう。さらに保育士が減少傾向にある近年であるが、インクルーシブ保育を含めた保育の専門性や理念を一人ひとりが認識し、支援を必要とする子どもの課題をチームで協同解決していくことがさらに重要視されている。そのため、その課題に応じて何を解決すべきか、それぞれの職種の専門性を共有できる部分の理解を深め、園全体で多職種との協力体制を整えていく必要がある。その基礎的な準備段階として、養成校での学びの中で他の職種への意識や理解への学びを取り入れていくことは重要なことと考える。

近年、重症児の子どもが通えるインクルーシブ保育園が開園されるなどの例もあり、医療的ケアの必要な子どもたちやその家族への支援のために医療、福祉、保健、教育等の多職種連携が必要不可欠となっていることは言うまでもない。重松（2018）は、「肢体不自由児を受け入れる幼稚園・保育園においては、医療及び福祉との連携の中でより細やかな配慮をしながら、インクルーシブ教育の実現を進めていく必要があると考えられる。（p.91）」と教育支援に対する計画を指摘している。さらに、保育所保育指針解説では、「保育所では、保育士、看護師、調理員、栄養士等が、各々の職務内容 に応じた専門性をもって保育に当たっている。それぞれの職員が、保育の内容等に関する自己評価等を通じて、保育の質の向上に向けた改善のための課題を把握した上で、それを保育所全体で共有する。その上で、課題への対応は、職員がそれぞれの専門性を生かし、協働して行う。保育所全体として保育の質を向上させていくためには、こうした一連の取組が組織的かつ計画的に進められていくことが重要であり、そのためのマネジメント機能が各保育所において強化されることが求めら

れる。(p.365)」と提示されている。

今回の研究においては、これら多職種の連携について、養成校での学びを実践していくため、その第一歩として筆者らの所属する短期大学部「幼児教育・保育科」と学部「保健医療学部理学療法学科」との連携授業の取り組みに着手していくこととする。

1. 医療系専門職と保育士の協働について

(1) 理学療法士と保育園との関わり

理学療法士は医療機関などで働くことがほとんどであり、一般的な保育所や幼稚園で働くことは極めてまれである。しかし、近年福祉施設などの経営方針の改革に伴い、これまで医療・介護に関わってきた介護老人施設等が保育所を運営する例も増加してきている。これら保育・教育の現場でも、健常な子供たちとの生活の中で、肢体不自由児が同年代の子どもと関わり生活していくインクルーシブ保育の受け入れが徐々に増加しているのも現状である。障害児等療育支援事業の中の施設支援一般指導事業や、保育所等訪問支援事業により、理学療法士等が保育所を訪問する機会も増えており、理学療法士の専門的存在は期待されるものである。さらに、子どもたちの身体能力の低下も問題視されている現代であり、身体を動かす楽しさと大切さを伝える「理学療法士による体操教室」を開催している施設などもある(岸本, 2010)。そこでは、これらのことを行ったことで、子どもたちの発達や障害児への対応に対して、保育士と理解・共有することの必要性を理解し、さらに保護者とのつながりを強化出来たことが報告されている。

(2) 保育士と看護師の連携について

保育士と看護師が協働する職務分野としては小児病棟、病児保育、保育所や障害児施設等がある。当然のことながら、これらの職場での看護師の子どもへの対応については、それぞれの特色がある。

これらの中で、小児医療の現場においての多職種連携・協働について、小野・谷川・濱中(2019)は、「小児医療の現場で多職種が協働していくために求められる力」をテーマとした連携・協働の在り方に対する調査アンケートを行っている。そこでは、「保育士は子どもと家族が安心して入院生活を送ることができるようサポートする『子どもと病院の生活を繋げる役割』(p.29)」があることが抽出されたとしている。これら病院機関についての保育の専門性は、医療行為を行うことのない職種であるが、そこでの子どもや家族の生活をサポートするための重要な存在であることが記録されている。ここでは、さらに保育士がその保育の知識以外に疾患に対してや看護・医療に関する知識を持つことを指摘し、他職種との情報を理解して家族と関わっていくことを述べている。これらの医療的な環境での研究調査においても、連携・協働についての必要性を提示しており、その理解の方法、役割の取得について分析していくことで、その家族の生活を保障していくことができると捉えているといえよう。

2. 保育士養成校機関での多職種連携への学びの基礎

保育士養成校の学生たちの就職先に関しては、肢体不自由児などの身体障害の発達に関する療育機関も含まれる。その機関での専門家は医療・療育関係者がほとんどであることはいうまでもない。ここでのポイントとしては、医療・療育機関における医療や療育の内容を、「子どもの発達過程といかにバランスを保っていくか」を医療・療育の専門家も理解・認識し、保育という視点やその必要性を知ることは子どもの成長を助長していくことに大きく関与するものと考ええる。

また近年、保育現場での知的障害、肢体不自由、発達障害などのある子どもを受け入れていく保育現場は増加傾向にある。社会性を育ていく手法として、これらの環境は受け入れられていくべきものであるが、このような子どもたちに対しては、保育士だけでは対応しきれないことも多い。これらは一人ひとりの子どもの発達に責任を持つことの限界が生じるのである。これらのことを相対的に考えた医療・療育・保育の社会的発展を目指していくとするならば、やはりこれらの職種の多職種連携は必要不可欠なものであるといえよう。今後更なる少子化を含め、家庭環境の変化による子育てに対しての支援は、どのような環境においても保育士の存在が求められる社会となることを想定すると、養成校在学中から、医療的な学科である看護・理学療法等の連携授業を実施し、社会に対しての広い視野とその理解を少しでも多く獲得していくことが望ましいと考える。

本研究では、子どもを中心とした多職種連携のあり方に焦点を当て、各養成課程において、身につけるべき資質、能力等について明らかにし、多職種連携教育としてのプログラムを確立していくことを目指している。その試みの一つとして、まずは他の専門職について、それぞれの役割や子どもを見る視点を知ることが必要であると考え、他学科の教員による授業を取り入れることとした。さらに、授業を経験した後に、多職種連携教育に関する学生の意識を調べ、今後の多職種連携教育の展開に対する課題を明らかにした。

II. 方法

1. 対象者

幼児教育・保育科の2年生で、「特別支援教育・保育Ⅰ」の受講者42名と、理学療法学科の3年生で、「発達障害理学療法学」受講者61名を対象とした。

2. 授業の実施日及びアンケート調査日

2022年6月に理学療法学科の教員が幼児教育・保育科の2年生対象の「特別支援教育・保育Ⅰ」の「肢体不自由児の理解と支援（第8回目・1コマ）」で授業を実施した。2022年12月には「特別支援教育・保育Ⅱ（秋学期）」の中の「肢体不自由児の療育の実践（第9回目・1コマ）」を実施した。

2022年7月に幼児教育・保育科の教員が理学療法学科3年生対象の「発達障害理学療法学」の「保育士から見た療育の展開（第9回目・1コマ）」で実施した。

アンケート調査はどちらの対象者についても、2022年11月に実施した。

3. 授業のねらいと内容

(1) 理学療法学科の教員¹⁾による幼児教育・保育科2年生への授業

「特別支援教育・保育Ⅰ」の授業概要には「（前略）発達障害や軽度知的障害を含めた障害全般について、発達や生活上の困難について理解するとともに、（後略）」とあり、到達目標の一つに「各障害に関する行動上、生活上の困難への理解と支援の方法について具体的に示すことができる」とある。「特別支援教育・保育Ⅱ」では、授業概要に「特別支援教育・保育Ⅰで理解した内容を基に、（中略）保育所等での個別の支援や配慮、子ども同士の関わり合いについて、グループで事例検討しながら学ぶ。（後略）」とあり、到達目標の一つに「様々な障害やその他の特別な支援を必要とする乳幼児に対する専門的な療育の方法を知り、集団生活の場での集団への支援と個々にあった支援方法を工夫することができる」とある。

これらの到達目標を達成するために、春学期の「特別支援教育・保育Ⅰ」では、「肢体不自由児の障害の特性とともに、その特性が発達や生活にどのような影響を及ぼすのか」を学修することを主なねらいとした。そして、秋学期の「特別支援教育・保育Ⅱ」では、「肢体不自由児の療育における保育の重要性と、保育士が担う役割」を学修することを主なねらいとした。

担当者は、障害児等療育支援事業の中の施設支援一般指導事業や、保育所等訪問支援事業として、保育所に訪問し、現場の保育士と肢体不自由児の支援に関して協働で取り組んできた。この取り組みを通して、特に乳幼児期の肢体不自由児の療育の中心は家族と保育士であると強く実感するようになった。肢体不自由児の身体障害の原因は種々の疾病であり、療育において医療的側面が強調されがちである。そうではなく、家族と保育士が療育の中心にいるということを学生が認識できること念頭に置いて講義内容を検討した。

「特別支援教育・保育Ⅰ」の「肢体不自由児の理解と支援」では、以下の四点について学修した。「①肢体不自由児とは」、「②肢体不自由をもたらし小児疾患」、「③肢体不自由児の特徴」、「④肢体不自由児の支援の基本的な考え方」。Youtubeにあがっている肢体不自由児の実際の動画を多く見せることで、肢体不自由児の特徴をイメージしやすいように工夫した。特に強調したことを示したスライドを図1に示す。このスライドを通じて、障害児保育は決して特別なものではないことと、支援を行うことは「体の動かしにくさ」に対してであって、「頭」に対する支援にならないようするという原則を強調した。

授業終了後に、授業の感想を書かせた。

(2) 幼児教育・保育科の教員²⁾による理学療法士学科3年生への授業

理学療法士として発達障害児やその家族の支援をする際には、保育士と連携して支援していく必要があるが、保育士の役割や視点が理解されないことで、専門職同士の対等な立場で

1) 担当者の専門領域は、「小児理学療法学」である。担当者は2000年に理学療法士免許を取得した後、理学療法士として脳性麻痺をはじめとする肢体不自由児に対する理学療法業務に22年間従事している。大学教員となった現在も、非常勤理学療法士として週1日の臨床業務を行っている。

2) 担当者は保育士資格、幼稚園教諭免許状を保持し、保育所での勤務経験は4年である。その後、保育者養成校の教員となり10年目である。

肢体不自由児の障がいの特徴をしっかりと押さえる

□ 四肢(⇒肢)や体幹(⇒体)に障がい(⇒不自由)があることは共通。

ただし…

- 原因は様々。
- 動かしにくさの特徴も様々。
- 動かしにくくなる場所も様々
- 肢体不自由の程度も様々。
- 知的障がいの程度も様々

つまり…

- 「ひとりひとり全く特徴が異なる!!!」

でも…

- これって、健常児だって一緒だよね!!
- 健常児とはちょっと違うけど、「**その子その子の特徴をしっかりと考えて保育をする**」という原則は変わらない!!

そして最も大切なことは・・・

□ その子その子の発達を促していく。

- キーワードは「**体の動かしにくさ**」に対して支援を行うこと。決して「**頭**」に対する支援にならないこと。
 - ✓ 身体はうまく動かないけど、その子なりに色々と考えたり、やりたいことがあるはず。
 - ✓ でも、丁寧であればあるほど、先回りの支援になっちゃうことが多い。つまり、支援者がその子の「頭」の代わりをしちゃってることが多い。
 - ✓ うまく動かない部分に対して適切な支援を行えば、その子は自分で色々と考えながら、こちらがびっくりするぐらいキラキラ輝くんです。

※ 具体例は秋学期に。。。

図1 「肢体不自由児の理解と支援」の講義におけるまとめのスライド

の連携ができず、コミュニケーションが円滑に進まないことがある。したがって、まずは保育とは何か、保育士の役割とは何かといった基本的知識を伝える。そのうえで障害児保育に関する保育士の役割を確認し、保育士がどのような助言を求めているか、何をどう伝えて欲しいのかの理解を促すことをねらいとした。

保育士が行う保育について、「子どもの状況や発達過程を踏まえ、環境を通して養護と教

育を一体的に行うこと」の内容について、保育場面の映像とともに理解しやすいように示した。また、幼児教育について、子どもの主体的な遊びを通して学びがあることを、鬼ごっこを例に出し、5領域の保育内容に触れながら伝えた。

障害児保育に関して、上述の保育の基本の上で進められるが、個別の対応が必要であり、個々の特性を十分理解した上で、発達を支援することを示した。

保育士が理学療法士と連携して保育を進めていくために、理学療法士から提供して欲しい情報として、個々の運動面での特性や積極的に取り入れたい動き、補助具を使用する際の助言とした。

授業実施前に保育に関するイメージを聞き、授業実施後にイメージが変わったこと、その他の感想について自由に記述させた。

4. アンケート調査の項目

両学科の対象者に、授業連携についてのアンケートを行った。今回実施した他学科の教員による講義についてどのように考えるのか、その他の学科とさらに連携を進めていくことについてどう考えるのか、他学科の学生と合同で演習等を行うことをどう考えるのかについて集計、分析した。

理学療法学科の学生には、以下の3つの質問項目とした。問1は「発達障害理学療法学の講義において、理学療法士だけでなく保育士の先生の講義を聴くことができ、よかったと思いますか。」、問2は「本学には、理学療法士だけでなく、看護師や保育士など様々な専門職の教員がいます。学部・学科を超えて授業連携を行うことを進めていくべきだと思いますか。」、問3は「本学には、理学療法学科以外にも様々な専門職について学ぶ学生さんがいます。他学部・他学科の学生さんと、合同で演習や実習などを行う授業を実施すべきだと思いますか」とした。

幼児教育・保育科の学生には、以下の3つの質問項目とした。問1は「特別支援教育・保育Ⅰの講義において、理学療法士の先生から講義を聞くことができ、よかったと思いますか。」、問2は「本学には、理学療法士や看護師など様々な専門職の教員がいます。学部や学科を超えて、授業連携を行うことを進めていくべきだと思いますか。」、問3は「本学には幼児教育・保育科以外にも様々な専門職について学ぶ学生さんがいます。他学部、他学科の学生さんと、合同で演習や実習などを行う授業を実施すべきだと思いますか。」とした。

両学科とも、問1～問3については、5件法（両端を「強くそう思う」「まったく思わない」とした）で選択させ、選択理由を自由記述で回答させた。

アンケートの目的とともに、結果をまとめたものを豊橋創造大学短期大学部紀要に投稿する予定であることを説明した上で、同意が得られた学生のみに回答を依頼した。

Ⅲ. 結果

1. 各授業の学生の感想及び振り返り

(1) 幼児教育・保育科に対する授業について

授業の感想には、「肢体不自由児の特徴」や「肢体不自由児の保育において気を付けるべきこと」などが具体的に記載されていることが多く、さらに「保育士が中心となっていること」についての記載も多かった。そのため、授業のねらいはある程度伝わっているとの印象を持っている。

障害児の保育は専門の施設のみで行うといった時代は過ぎ、インクルーシブ保育の時代になっている。このため、障害児保育は特別なものではなく、誰もが当事者になるという意識が重要であると考えている。「障害児保育に興味を持った」や「障害児保育についてもっと勉強していきたいと思った」という感想も多かったことから、一定の学修効果は得られていると考える。

障害児保育において、個人個人に合わせた保育をどのように行うか、また誰とどのように連携していかなければならないかを、保育士自身が現場で柔軟に考えていく必要がある。現在は講義形式で授業を進めているが、事例を紹介しながら演習形式でグループワークを行う方法をとった方が、より能動的な効果的な学修につながると思われる。特に、秋学期に行う「肢体不自由児の療育の実際」についての講義形式を再考していく必要があると考えている。

(2) 理学療法学科に対する授業について

受講前の保育に対するイメージについては、身の周りのお世話をすることや、子どもと遊ぶといった内容が多かった。ひらがなを教える、教育する、など学校教育に近いイメージも散見された。また、近年、保育士としての仕事の過酷さが強調されるようになってきたことの影響か、大変そう、ストレスがたまりそうなど体力面や待遇面に触れる内容も多かった。

受講後には、遊びを通して学んでいることや、そのための保育士の工夫、子どもの主体性が重要である、といったことがイメージの変化としてあげられ、具体的な保育の内容が伝わったと思われる。その他の感想では、保育士の役割の重要性についての気づきがあった。学生には概ね意図したことが伝わったと考えている。科目の主担当者から、授業開始前に、保育士からの講義の意義について学生に分かり易く周知され、それによって学生の意識が高まったため、授業への構えができたことも学びが深まった要因の一つであると捉えている。

課題としては、前半で時間を使いすぎ、後半の障害児保育に関する内容が希薄になったことと、保育士と理学療法士の連携のあり方について、根拠となるデータを蓄積することである。今回は自身の経験から、理学療法士に求める役割についてまとめたが、今後、事例を収集し、重要な要素を抽出し伝えていく必要がある。

2. 授業連携に関するアンケート調査結果

(1) 幼児教育・保育科2年生の結果

アンケート対象者（アンケート実施日の授業出席者）35名中32名から回答を得た（回答率

91.4%)。1名、選択肢と選択理由が明らかに不一致のデータがあり、それについては、除外したため、分析対象は31名とした。表1と表2に結果を示した。

問1では、「強くそう思う」が17名(54.8%)、「そう思う」が10名(32.3%)、「どちらでもない」が4名(12.9%)であった。「強くそう思う」「そう思う」の理由としては、普段聞くことがない専門的な内容であり、体験談なども交えて聞くことができことで興味を持ち、対応方法を知ることができ、理学療法士の視点を学べたことなどが理由にあげられていた。「どちらでもない」を選択していても、「知らないよりは知ってる方がいいと感じたから」のように、どちらかといえば肯定的に評価していることを理由にあげていた。

問2では、「強くそう思う」が17名(54.3%)、「そう思う」が10名(32.3%)、「どちらでもない」が4名(12.9%)であった。「強くそう思う」「そう思う」の理由として、多くの知識を身につけられることをあげていたり、他の職種について知ることによって情報共有しやすくなったり、連携してよい対応がとれるといった将来の連携に役立つことが理由としてあげられていた。「どちらでもない」について、「気になると言えば気になるけど、自分の専門の職について詳しく知ればいいのかと思ったから(原文通り)」といった意見もあったが、「保育以外に必要な知識を学べるから」といった肯定的意見も含まれていた。

問3では、「強くそう思う」が9名(31.0%)、「そう思う」が8名(27.6%)、「どちらでもない」が12名(41.4%)、「そう思わない」が2名(6.9%)であった。「強くそう思う」「そう思う」では、他の専門分野について知ることができ、直接体験することで興味が深まるといった理由であった。中には、全員参加というよりも、やりたい人、学びたい人がやればよいという意見もあった。また、「どちらでもない」を選択していても、他の学科と学び合うこと自体に否定的な意見は少なく、どのようなことをやるのか想像できなかったり、そのことで時間を割くことの意義について困惑していたりする意見が見られた。「そう思わない」では、各学科の学生の人数差を危惧する意見や、興味のある分野ではないといった意見であった。

表1 授業連携に対するアンケート結果(幼児教育・保育科2年生)

問1.	特別支援教育・保育Ⅰの講義において、理学療法士の先生から講義を聞くことができ、よかったと思いますか。				
	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない
	17名(54.8%)	10名(32.3%)	4名(12.9%)	0名(0.0%)	0名(0.0%)
問2.	本学には、理学療法士や看護師など様々な専門職の教員がいます。学部や学科を超えて、授業連携を行うことを進めていくべきだと思いますか。				
	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない
	17名(54.8%)	10名(32.3%)	4名(12.9%)	0名(0.0%)	0名(0.0%)
問3.	本学には幼児教育・保育科以外にも様々な専門職について学ぶ学生さんがいます。他学部、他学科の学生さんと、合同で演習や実習などを行う授業を実施すべきだと思います				
	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない
	9名(29.0%)	8名(25.8%)	12名(45.2%)	2名(6.9%)	0名(1.8%)

表2 選択理由に対する自由記載の要約(幼児教育・保育科2年生)

問1. 特別支援教育・保育Ⅰの講義において、理学療法士の先生から講義を聞くことができ、よかったですと思いますか。
<u>「強くそう思う」と「そう思う」と回答した理由</u> ● 脳性麻痺の原因(考えられるもの)やどのような対応をすればよいのかを具体的に学ぶことができ、障害のある子どもの見方が変わったから。 ● 実際のことについてもお話を聞くことが出来て理解を深めることが出来たから。 ● 保育で学ぶことだけではなく理学の方の話も聞くことにより違う目線で考えることが出来たから。 ● 理学療法士の方から見た障がい児との関わり方や専門知識を知ることができて、障がい児と関わることに對しての不安が和らいだから。
<u>「どちらでもない」と回答した理由</u> ● 知らないよりは知ってる方がいいと感じたから ● 保育の講義だけでは分からないこと学べないことを知ることができるから
問2. 本学には、理学療法士や看護師など様々な専門職の教員がいます。学部や学科を超えて、授業連携を行うことを進めていくべきだと思いますか。
<u>「強くそう思う」と「そう思う」と回答した理由</u> ● 幼教と関連している分野だと思うので、色んな職種からみた保育・子どもたちについて学びたい。 ● 専門的な話を聞くことで障害を持っている子のケアなどについても理解を深める機会になると思うから。また、保育士と他の専門職との連携についてもどのような事なのか分かりやすくなると思うから。 ● 他の学科の先生の話聞けるのは貴重だしほかの先生のことも知りたいから。大学ならではの強みだと思う ● 進路の幅が広がったり、今後に役立つから ● 保育の現場では病気や体調の変化の専門的知識を詳しく分かっていないことがあるので看護や理学療法の方たちと情報共有ができるように進めていくことをした方がいいと思った
<u>「どちらでもない」と回答した理由</u> ● 別の観点からも考えられるようになり、新しい学びや発見があるから。 ● 気になると言えば気になるけど、自分の専門の職についてを詳しく知ればいいのかと思ったから ● どちらでもいい
問3. 本学には幼児教育・保育科以外にも様々な専門職について学ぶ学生さんがいます。他学部、他学科の学生さんと、合同で演習や実習などを行う授業を実施すべきだと思いますか。
<u>「強くそう思う」と「そう思う」と回答した理由</u> ● したい人はできるようにしたいと思います。 ● 座学より直接体験の方が気付きが多いからよりその学習への興味が深まると思う ● 園で倒れてしまった子供の対応の仕方などを他の学部と一緒に実習したら良いと思う ● 自分の学んでいることを振り返り知識を深めることが出来る上に他の学科の専門分野について知ることが出来るため。
<u>「どちらでもない」と「あまりそう思わない」、「まったくどう思わない」と回答した理由</u> ● あまりやったことがなく想像がつかなかったから ● 専門職を選んで学習を行っている人にとってその時間をさき他学部と学習を行うことがメリットとなるかは疑問だ ● 相手の得意科目の時の実習だと迷惑をかけてしまうのではないかとか思うから。 ● 同じような科目を受講するなら合同で受けて様々な面からみられるとより良い学びに繋がるとか思うから ● 今までにそういった経験がないのでなんとも言えませんが保育科がどんな活動を行っているのかまた他の学部の活動も見てみたいと感じました。

注) 学生の表現に基づいて記載している

(2) 理学療法学科3年生の結果

アンケート対象者57名で、回答率は100%であった。

結果を表3と表4に示す。問1と問2では、「強くそう思う」と「そう思う」の合計がそれぞれ91.2%と93.0%であった。問3では「強くそう思う」と「そう思う」の合計が63.2%と減少し、「どちらでもない」が31.6%に増加した。

問1は今回実施した幼児教育・保育科の教員による授業に関する質問であり、9割以上の学生が講義を受けられてよかったと考えていた。また、今回実施したような他学部・学科の教員による授業連携を実施すべきかをたずねた問2において、9割以上の学生が「強くそう思う」と「そう思う」と回答した。他学部・学科の学生を含めた合同授業の実施については、「強くそう思う」と「そう思う」と答えた学生割合は減ったものの、6割以上の学生が実施した方がよいと考えていた。理由を見ると、「多職種連携」や「チーム医療」、「異なる視点や意見」といったキーワードが出てきている。

問3では「どちらでもない」と答えた学生の割合が31.6%と増加した。「行ったことがないから分からない」といった意見がある一方で、「行う必要性や意義を感じない」と答えた学生もいた。

表3 授業連携に対するアンケート結果（理学療法学科3年生）

問1.	発達障害理学療法学の講義において、理学療法士だけでなく保育士の先生の講義を聴くことができ、よかったと思いますか。				
	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない
	15名 (26.3%)	37名 (64.9%)	4名 (7.0%)	1名 (1.8%)	0名 (0.0%)
問2.	本学には、理学療法士だけでなく、看護師や保育士など様々な専門職の教員がいます。学部・学科を超えて授業連携を行うことを進めていくべきだと思いますか。				
	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない
	18名 (31.6%)	35名 (61.4%)	4名 (7.0%)	0名 (0.0%)	0名 (0.0%)
問3.	本学には、理学療法学科以外にも様々な専門職について学ぶ学生さんがいます。他学部・他学科の学生さんと、合同で演習や実習などを行う授業を実施すべきだと思いますか。				
	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない
	11名 (19.3%)	25名 (43.9%)	18名 (31.6%)	2名 (3.5%)	1名 (1.8%)

表4 回答の選択理由に対する自由記載の要約(理学療法学科3年)

問1. 発達障害理学療法学の講義において、理学療法士だけでなく保育士の先生の講義を聴くことができ、よかったと思いますか。
「強くそう思う」と「そう思う」と回答した理由 ● 理学療法士は違う視点を学べたから。 ● 他の職種との連携方法について考えるきっかけになったから。 ● 保育士の先生の接し方など、保育の現実について学ぶことができたから。 ● このような機会はなかなかないから。 ● 自分が小児関連の仕事に就きたいと考えているため。 ● 保育士にも興味があったため。
「どちらでもない」と「あまりそう思わない」と回答した理由 ● 自分は小児にはあまり興味がなかったから。 ● 小児領域に興味ある人にとってはとてもいい内容と思うが、全員参加でなくてもよい。
問2. 本学には、理学療法士だけでなく、看護師や保育士など様々な専門職の教員がいます。学部・学科を超えて授業連携を行うことを進めていくべきだと思いますか。
「強くそう思う」と「そう思う」と回答した理由 ● 多職種連携が医療において重要であるため、学生のうちから、そのような授業連携を行うことは大切だと思う。 ● 別の授業の話聞くことで理学療法士になったときに何をするとその職業と連携しやすいか分かるから。他の職種の人が理学療法士にどうしてほしいのかなど意見交換ができる。 ● せっかく他の職種の先生がいるのだから、多職種連携の面からみてもやってみるべき。実際その職に就いている方の話、実技を学ぶ方が分かりいと思う。 ● チーム医療なので理学療法以外の勉強だけでは分からない事があるから。理学療法のこと以外もわかり視野が広がると思うから。 ● 作業療法士や言語聴覚士の学科もないため、多職種の連携をするための接点が少ないから。違う視点からの意見が聞けるとできると思うから。
「どちらでもない」と回答した理由 ● 授業が増えて大切そうだから。
問3. 本学には、理学療法学科以外にも様々な専門職について学ぶ学生さんがいます。他学部・他学科の学生さんと、合同で演習や実習などを行う授業を実施すべきだと思いますか。
「強くそう思う」と「そう思う」と回答した理由 ● 他分野の学生とディスカッションする事でわかることがあると思うから。今のうちから他部門の意見を聞けるのは良いと思う。多職種連携を行っていくためには必要になってくと思う。 ● 他学部・他学科との会話でコミュニケーションを広げる。いろいろな考えをもった学生の話をしけるから。 ● 別の視点も加わることでより良い話し合いや学習ができそうだから。 ● サークル活動も少なく、他学部の人との接点が少ないから。 ● 他学科、学部の人達と関わり、出会う機会がないから。他学科がどんなことを教わっているのか聞いてみたい。
「どちらでもない」と「あまりそう思わない」、「まったくどう思わない」と回答した理由 ● 行ったことがないからわからない。 ● 他学部の学生と授業を実施してもあまり視野が広がると思えない。初めて会う人とコミュニケーションをとる練習という意味で行うなら良いと思う。 ● 交流が増え良い点はあると思うが、うちとけるまでに時間がかかり、楽しくない可能性もある。 ● 行う必要性や意義を感じない。

IV. 考察

アンケートの結果から、各専門領域の教員が別の学科で座学の授業を行う今年度の取り組みについて、どちらの学科の学生についても、他の専門領域について興味を持ち、専門職について理解するとともに、自分が専攻する専門職に活かせる点に注目したり、自身の選択した専門職の役割についても改めて振り返ったりする意見が見られた。

学科を超えた学生同士の交流を伴う課題を取り入れていくことについては、両学科とも少なからず消極的意見もあった。授業の意義を認識させ、学生に対して具体的な実施方法を示して何を行うかイメージできるようにしていくことが必要である。また、他学科との学生同士が対等の立場で課題を行っていくためには、どのような課題があるのかも考えておく必要があるだろう。

子どもを中心とした多職種連携教育の意義や課題について再考し、今後の展開についてまとめた。

1. 保育士養成課程にとっての多職種連携教育の課題

園内で多職種連携を図ることについては、前述のように、保育所保育指針解説で、看護師や調理員、栄養士等が専門性をもって保育にあたることを示しているが、看護師や栄養士が園に常駐していない園もあり、学生は園内の連携について実習時にも実践的な学びは得られにくい状況である。

園外の専門職との連携について保育所保育指針解説の中で、「障害のある子どもの保育に当たっては、専門的な知識や経験を有する地域の児童発達支援センター・児童発達支援事業所（略）・児童発達支援を行う医療機関などの関係機関と連携し、互いの専門性を生かしながら、子どもの発達に資するよう取り組んでいくことが必要である。（p.58）」とある。それを踏まえ、専門科目（例えば、保育士論、こども家庭支援論、特別支援教育・保育等）の中で多職種連携の重要性について触れられている。しかし、それをどう実践すれば良いのかなど具体的に意識する機会は少ない。また、保育士資格の取得にあたっては、児童養護施設や障害児者施設等での施設実習が必須である。こうした施設は多様な専門職がおり、多職種連携が実践的に学べる場であるが、実習期間としてはおおよそ10日間と短く、様々な児童福祉施設がある中から一か所だけの実習となり、学ぶ内容は限られる。さらに、保育所や幼稚園、認定こども園といった幼児教育の施設に就職を目指す学生としては、学びへの意欲が低いことも少なくない。

榊原（2021）が教職課程コアカリキュラムについて「多職種連携による支援体制を構築することの「必要性の理解」にとどまっており、IPWを実践するために必要な知識やスキル、態度等の具体的な学修課題までは明示されていない。（p.98）」（IPWは多職種連携協働のこと）と分析しているように、教職課程においては、多職種連携に関する学びは、医療系の養成課程よりも蓄積されていくように計画されていない。幼稚園教諭免許状取得の必須科目と重複する科目が多い保育士養成課程についても、同様の課題がある。

このような事情から、学科を超えた授業連携を進めていくためには、その前段階の学習課

題を明らかにし、連携についての学びが積み重ねられるように学習内容を考え、各科目の担当者間で共有するなど、学科内の教員同士が連携していくことも必須である。

2. 医療系専門職養成における子どもを中心とした多職種連携教育の学びの意義

医療系の専門職養成課程を持つ大学では、2000年頃から専攻、学科をまたいだ、学生同士がともに学ぶ教育プログラムを取り入れる大学が出てきて(前野, 2015)、近年では多くの大学で実施されるようになってきた。多職種連携については、それぞれの教育課程コアカリキュラムにも記載され、その重要性は十分に認知され、多職種連携についての学びが蓄積されるように計画的に組み込まれている。ただ、医療系の職種は、幅広い年齢層の患者や利用者を想定しており、小児の領域は限られたごく一部である。アンケート調査の結果にもみられたように、小児にあまり興味のない学生は、そこに多くの時間と労力を費やすことは避けたいと考えても仕方がないことかもしれない。だが、小児について学ぶことは必須である。その学びの中で、日常生活を支える家族や保育士への理解、保育士が子どもを支援する視点は重視されるべきであろう。保育の専門性を知ることは、患児への治療やリハビリの際の関わり方、患児や家族との安定的な関わりのための基盤となる学びになるのではないだろうか。

また、小田(2021)が述べているように、保育や教育の現場での連携は、主に治療を目的とした医療系専門職同士の分業的連携とは異なる。つまり、各専門職の職務境界があいまいな部分が多く、そうした状況下では、各自が保有している子どもに関する情報を共有し、専門職同士がコミュニケーションを取りながら、お互いに知識を高め合い、包括的に問題解決を図っていくという側面がある。子どもを中心とした多職種連携教育では、医療を中心とした場だけではなく、保育・教育の場も想定され、医療系専門職養成の学生にとっても、多様な連携のあり方を学ぶ機会となり得るだろう。

V. まとめ

過去にも、理学療法学科の教員が、幼児教育・保育科の学生の授業を一コマ担当することがあったが、1回のみで継続されなかった。それは、教員同士の関係性で成り立っていたことであり、その担当者が退職する等すれば、立ち消えてしまう属人的なものであったためである。継続させていくためには、組織的な枠組みが必要である。本学では、理学療法士および看護師の医療系の専門職養成課程と、保育士養成課程を設置している。子どもを中心とした多職種連携に関する学部を超えた取り組みを試みることは、今ある本学の資源を活かすことであり、本学の独自性にもつながるメリットがある。この点も踏まえ、互いのカリキュラムに組み込んでいくことが求められる。

今後の展開を検討していくために、①多職種連携に関する事前の学習内容を明らかにすること、②具体的にどのような課題に取り組むのか文献的検討を重ねること、③保育所、児童福祉施設等にアンケートを取り、現場で求められている園内、園外の連携に必要な知識や能力を分析していくことが当面の課題である。そのうえで学びの内容を精査していき、科目に取り入れられるよう、各学科に向けて提案していきたい。

引用文献

- 岸本泰樹著（2010）理学療法士の民間保育園への関りについて—我々に求められた新たな可能性— 理学療法学Supplement, Vol.37, Se2-073.
- 厚生労働省（2018）保育所保育指針解説
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyo-ku/0000202211.pdf>（2022年12月8日閲覧）
- 前野 貴美（2015）専門職連携教育 日本内科学会雑誌, 104巻, 12, 2509－2516.
- 小野 鈴奈・谷川 弘治・濱中 喜代（2019）小児医療の現場で多職種が連携・協働しているために保育士に求められること 医療と保育, Vol.17, No.1, 28－40.
- 小田 郁子（2021）学校における他職種連携研究の課題と展望—連携概念の定義と連携研究を捉える視点— 東京大学大学院教育学研究科紀要 第61巻, 353－364.
- 榊原 剛（2021）教員養成における特別支援教育に対応できる多職種連携教育試論 名古屋女子大学紀要 67, 95－105.
- 重松 孝治（2018）幼稚園における肢体不自由のある幼児への配慮の一考察 川崎医療短期大学紀要, 38号, 91－94.